

西口正浩『企業に求められる誠実さ(Integrity)』

企業による犯罪や不法行為（一般に企業不祥事と呼ばれている）の記事は毎日のように新聞に載っています。次から次へと事件が起きるたびに、消費者は企業に裏切られたとの思いをいただきますが、企業の犯罪や不法行為そのものは一向に減る気配を見せません。とても残念なことです。

むろん、企業は人間の集団ですから、全く間違いを起こさないということはありません。ただ、可能な限り間違いを起こさないようにする努力と、仮に間違いを犯してしまったら最大限誠意を持って善処する姿勢が必要なのだと思います。それが、消費者の信頼を回復する第一歩ではないでしょうか。

企業社会責任（CSR）は、大きく 2 つの考え方に分けられると考えられます。一つは、一定の基準（労働時間、環境規制など、いわゆるトリプルボトムライン）を業務に組み込むというもの。もう一つは、行動規範としての誠実さです。前者については ISO14001 や SA8000、GRI など様々な基準が設けられており、後者については、麗澤大学企業倫理研究センターが開発した ECS2000（倫理法令遵守マネジメント・システム規格）や、各企業の倫理行動規範などがあります。

評者自身は、前者と後者は決して背反するものではなく、相互補完的な関係にあるのではないかと思います。後者の「誠実さ」・倫理的側面はなぜかあまり日本で普及が進んでいないように見受けられます。

筆者の西口さんは、CSR の中でも特に「誠実さ」の側面に着目し、この論文を書き上げました。あえてこの側面に着目してこだわったのは、筆者の勘の鋭さというか、センスの良さではないかと思います。近年相次いでいる企業の犯罪や不法行為は、当該企業の存続を危うくすることにもつながっていますが、その原因は単に食品の賞味期限切れとか衛生管理基準を満たさないといった問題ではなく、「消費者を裏切った」という倫理的な点で非難されることが多いからです。

企業の誠実さを追求するうえで、企業にばかり対策を求めてもなかなか実現は困難であり、社会の側が企業を評価し、誠実な企業には支援するといったサンクションが必要となります。筆者はアメリカの事例を挙げながら、社会的責任投資（SRI）や倫理的消費者（エシカルコンシューマー）、非営利組織（NPO）にその役割を期待していますが、日本ではこれらの主体が企業に対してどの程度有効にサンクションを与えられるのかについては、残念ながら多くの留保条件をつけなければならないのが、残念ながら偽らざる現状でしょう。

企業の「誠実さ」は単なるお飾りの理念にとどまるのではなく、今や企業の存続に直結する重要なキーワードとなっていますが、いざ自らの企業が存続の危機に立たされて初

めて正面から取り組むようになる（それまではまじめに取り組まない）という企業もまだまだ多くあるのではないのでしょうか。

西口さんをはじめ、これから企業社会に入っていく学生さんにとっても、この論文で取り上げた問題は決して他人事ではありません。企業で、倫理に反するような業務を命じられたとき、業務命令に従うのか、それとも自分の良心に従うのか。場合によっては、きわめて過酷な二者択一を迫られるかもしれません。

これから企業社会に入ろうとする全ての学生さんに、いちどは考えてほしい問題です。この論文は、私たちにとても重要な問題提起をしてくれたと思います。